シネマ女性学

死の収容所から逃れて

松本 侑壬子・ジャーナリスト

「事実は小説よりも奇なり」という言葉があるが、この映画はさしずめその典型的な一例だろう。第二次世界大戦中、悪名高いナチスの死の強制収容所内で恋に落ち、一緒に脱出生還した恋人たちの実話に基づく作品である。奇跡的な脱出劇の後、いったん別れ別れになった二人は32年後に再会するが―。

1944年のポーランドと1976年のニューヨークを舞台に、信じがたいほどの厳しい運命を生き抜いた実在の二人の命がけの愛とその行方を、監督と脚本家の女性コンビが感動を込めて描く。

ハンナ（ダグマー・マンツェル）は、ドイツからアメリカに渡り結婚、今はニューヨークで学者の夫と娘と共に幸せな家庭生活を送っている。1976年のある日、洗濯物を受け取りに行ったクリーニング店のテレビから忘れもしない懐かしい声を聴く。画面でインタビューを受けているのは、32年前に死の収容所から脱出後に生き別れ、死亡したはずの恋人トマシュではないか。急いで帰宅したハンナはかつてトマシュの捜索を依頼した赤十字社に電話をかける。

1944年のポーランド。若いハンナ（アリス・ドワイヤー）とトマシュ（マテウス・ダミエッキ）は、アウシュヴィッツ強制収容所で出会い、恋に落ちる。トマシュはポーランド人の政治犯でユダヤ人よりは多少の特権があり、二人はそれを活用して秘かに逢瀬を重ねた。若いころ見た別の映画で、収容所の蚕棚のようなベッドで、１組のカップルが他人の目も憚らず愛を交わす場面があり衝撃を受けた。人間、どんなおぞましい場所でも人と愛しあうことができ、それによって生きる希望を捨てずにいられる、ということであろうか。

レジスタンス仲間から収容所内の実態を映したフィルムを託されたトマシュは脱出の機会をうかがっていたが、そのときには必ずハンナを一緒に連れ出すつもりだった。決行の日、かねて用意していたドイツ軍の軍服を身に着け、ナチスの分隊長になりすます。そして、わざと脅すような声でハンナを連行するふりをして門番をかわし収容所を出る。まさに手に汗握る大芝居で脱出は成功する。実際、アウシュヴィッツでは600件もの脱出があり、うち３分の１が成功した。1944年には映画と同じ方法で脱出に成功した男女が４カップルもいたという。

収容所からは逃げたものの、抵抗運動の中で二人は二度と会えぬままに、月日が経っていく。そして、運命のテレビ放送を聞いたハンナは、猛烈な勢いでトマシュの行方を追い始める…。

30余年の歳月は、ハンナの人生を大きく変えた。もちろんトマシュのそれも。夫は妻の突然の変貌に理解を示し、ポーランドまで行かずにいられないハンナを見守っている。トマシュの住む村に向かってバスが走る。村の広場で待つトマシュ。そして、バスからハンナが下りる。見つめあう二人。

あのときのかけがえのない愛の決死行。トマシュのお蔭で救われた命。愛するトマシュは恋人であり、命の恩人でもあった。ようやく今、トマシュと共に新しい人生に歩み出せるのだ。だが…。ハンナの選択に静かな感動がこみ上げる。

『あの日　あの時　愛の記憶』

ドイツ映画（111分）／アンナ・ジャスティス監督

８月４日より、銀座テアトルシネマほか全国ロードショー

© 2010 MediaPark Film-und Fernsehproduktions GmbH